

四日市で始まった急須の大量生産が原料粘土の枯渇により存亡の危機に直面したため、周辺の陶器産地で新たな原料を使える製法を探すことにしました。当時岐阜県大垣市の赤坂村に轆轤を使って急須を作っていた兄弟の焼き物を、大垣藩家老小原鉄心がその素晴らしさに感動して献納品に採用し、名前を「温故焼」と名付けました。彼の働きにより温故焼は皇室や徳川家にも献上されました。さらに新政府は1878年のパリ万博とシカゴ万博に出品し、名誉大賞を受賞しました。当時としては轆轤で作られた急須はまだありませんでした。温故作者の清水平七は、1840年16歳の時に清水焼、備前焼の作陶の修行に出かけ、桑名の森有節にも学び、名古屋城内の御深井窯に従事し茶器を作りました。1859年には郷里の赤坂のお茶屋敷内に窯を築き、地元の金生山の赤土と勝山の白土を混合して下の写真のような独特の風合いの焼き締め急須を作りました。一方、平七の弟の石僊は陶器づくりを学んだ後、大阪で絵画や書道を学び各地を巡遊し、彫刻、絵付け、金彩等いろいろな茶器を作りました。石僊は赤坂の田舎から四日市に出て売ることを考えて大雅と工房を構えました。しかし、温故焼で修業した轆轤師が増えて粗悪品や贋作が出回るようになり、さらに大雅と石僊との製品落款についての確執から商標問題が起こり、一大事件に発展したことから石僊は四日市を離れ最終的な落ち着き先に常滑を選んだ。2代石仙は、常滑で創作的な急須を作って独特なイメージを造りだしていた。小西友仙は、異母兄弟で常滑に一家をなしていた。

		
<p>金生山と勝山の混合粘土製</p>	<p>細字と松皮 赤土</p>	<p>松皮宝瓶 獅子</p>
		
<p>金彩宝瓶</p>	<p>湯冷まし 獅子</p>	<p>煎茶碗</p>

常滑に来た2代石仙 独特のセンスを持っていた

			
<p>呂 洞賓 ロトピン りょどうひんず</p>	<p>絵重要文化財</p>	<p>香炉風急須</p>	<p>篆刻彫り急須</p>